源氏物語悲竹

三

113
976
2

源語忍草巻之二

目録

澪標　蓬生
関屋　繪合
松風　蔦雲
朝顔　乙女
玉葛　初音
胡蝶　螢
常夏　篝
野分　御幸

三絃はくし

須磨にて故院源の御夢にさやかに見え給ひ御はらからに
源をよく〳〵頼み給ひし後源ふかく悲しみ給ひて御弔ひの
為に八講といふ御法事を執行ひ給ひし此帝は源を
召返させ給へは御心ちもさはやぎ御目もよくならせ給へと
将猶心ぼそく世に久しかるまじくおぼしめさせ給へは
御位をゆづらんと思し召二月に春宮十一にて御元服ありて
御年よりは大人びさとく源によく似させ給へり
同二月廿日過に御即位あり帝は御下りさせ給ひて朱雀院
と申奉る源内大臣にあがり給ひて執政し給ふ

大正十五年二月 花…氏寄贈

イ 13 976 2

はじめたまはるとぞうけたまはる藏成がうんとして
昔の山留葵の上の山父左大臣ふ濃目左大臣と改たた
まひ摂政をさせ給ふ改め中納言明石の巻ふ宰相
成給ふ権中納言成ふ葵の上の山腹の君
昇殿し給へ是三月ふも成給ふ明石の山留とは春月ふ
山知ふ月て人をはらの山給ふ位ふ入て十六日ふ
生れ給ふ姫君生れ給ふ世ふ思召のまゝ姫う
思召て高砂の御すめ遣さる子達ふ乳母ふ
寄むと人を遣はさるは思ひて源めはとの家へ
知らてうろ付の事はあひ姫くうて明石へ下しふ

山ふ
いつかも神手かうん乙女子ら安を へて撫ら岩の根ひさ紀
山ふ月一何ふ
獨して撫ら神の方ぐあさた根ふ山ふるのうけとぞまち
入道ふ一付さとてさくぐらん祈思ひやるとふ志まれふ
明石の巻ふ二歳ふ成ふ紫雲院ふ若宮を氏巻ふの
春宮ふ立給ふ今の帝は山母ふ後ふ山ふ中宮也榊の巻ふ
山ぐ一撫ら一ふ入ふ今ふ入道の宮とふ左ふ天皇ふ成ぐらん
知行志ぐ一ふ文ふ権中納言の御娘十二ふ成
ふを御即位ふ年は八月ふ女御ふ立給ふ弘徽殿と

以源頂禁にて西風殺ごとの早く吹て住吉へ立頼あり立頼
ゆどこさふりみる者をも引具して住吉へ詣あり公卿殿上人多く
出給して清らを成事よりさ見物也彼行つれ出の面事ふ
二てびび〳〵住吉へまゐでみれば舟をも舟出して海にでけり
岩ふ舟さしよせて乙姫が御ひいつ〳〵罵りて詣でで
給へ人あり是誰人ぞと問すれば源内大臣の事也かとい
ふる出ひびこさもとゝでけり今日も事あひ数なるぬ分の
ゆどをこゆるも舟〳〵もつぬへうもそろうして舟を難波へ
漕戻させり源いかくこもとせめつぎ早して惟光多く
中て御用の事ゆやと惟光いちいと紀親を常ふ用意して
懐中物々迄が長出して御車にもれば早くゆるとおひて
出よふ紙り源
ゆとつく〳〵寄りもるふちまでもめぐりはひぬるえふ
と書てはりのいとれ〳〵迄が出ふ人〳〵行つ
数ぬなふの事もいまの紀よ何ぞ法て思ひ初ん
京へ海のあひて行う人〳〵法のつ〳〵ふりどふ都へ
引ゆ迄給へと内あひ何ふ世ど幸経へ牛をあく〳〵迄
今さ〳〵都の住居もいこ行〳〵たで今まで源の出必ず
ゆの〳〵ねど約束たのむべさ身にもあ〳〵び物と登りて又
海へこんも分はは行〳〵迄がいつそぎてもおぢ〳〵入道も

姫君は別れを悲しび給ふ一日一日と延べ引き給ひ代々の御
榊の巻ふ齋宮ふ立ち給ひ給へ紫姫の御娘都へ帰り給ふ御母
六条の御息所も同じく神ありあひてありしの極六条京極は
住み給ふ源氏の事いぜんにておけまどよろづのすい
きょうぐ
参詣は神のたゝりやすく御縁よりすくなひ物と思ひ
けまどつゝみつゝまれは年をかさね思ひ思ひて尼ふ
成り給ふ齋宮も発心仏法をいむ羅ふつゝまれとふ御息所
ぐぜい
髪切り給ふ御とも御ひは源六条へ年のあふ几帳ごし
御息所対面ありてなを行ふ物をあり齋宮の事を
教へ給ふあぐれば行るまじき源の御息所とゝやすきろおし

とあるまゝへと其道の御ざーあさやーにとゝ行へるー源か
帝公の内ふ齋宮のいち御はおひきち行ひたんとこゝ海ふし
ぬまをかひ也行事も御遺言のことはもあぐへーと給へ
ありて御まをふ七八日ありてこゝやすかへまをふ帝跡のこと
源ゝゝとりてとあひへまを日数をりて齋宮も我御ま
二条院へ引き帝の今みーとゝあーく形ーせあり女御は
まーせんと思ふ源ハ帝兄朱雀院ハ我帝代は齋宮の伊勢へ
下り給ふ時別れの櫛をさゝせあひて雅をかぐの御ものち我
ものんーけまの御こゝりはは女御ふせんと思ひて念ころふ
ゆゝえさせ給ふを源ゆあひて若つぐふ読合せる樂ふ帝

世をうくるまでもなくまぜがうしろごころふかきさまの
さまなるものとおもひ侍るが秋宮を女御と思ひよせ侍る
ものゆゑにとかくなげくが苦つぎ自病氣みて侍りなりぬ
をとうにさまの常にさまなるのいとよく侍るしるしにみひて
入内ふさぎめ給へる

よもぎふ

源氏藤ゆかりなる藤侍るつぼみ法師の所のもとに歌を
悲しきなかに中にも未摘花の巻ふる遂初めの故常陸の宮の
ものゆかしくとうにものをきこえ侍るが源氏はなれよ物ぶし

ものゆかしい音信をとこそとよるを源氏ものゆかしくはげるものゆ
ものゆかしくもれ給ひぬ不思議なるものをみてあるれこ
とをひとへの清内のくもゆかしくもあるこちせふ
須磨の謠ざよるを級て事同給へるが外人なりとより
まづ記文なるをが内くの苦しさ悩むこそ女づくも約ちを
ひとく滅しさ海さる薬花もらるを遂ふふさ遂ふ淺茅蓬生び
ちげを藤ふ軒をひくそふ物も形を引しる象のこゑ朝夕より
耳別て絶しさ事数をくびを未摘の西見ぜんじは若びををぞ
京を出ふ形ふふふ法師とふ中にもものを世を
離遂ある変ひをれがちげさ遂をさへ引掛のせんとも

思ひ寄給ひぬ。この末はもしの四毋のとゝめ〜せふれちぶまて
文領の小の方小成しへを文領のめかをと末摘
ぜ
ゝたあるばをあひ口惜うをき今末つむせんかゝあさ仕みて
るをつをはくれむ体をたゝし我姫の女房をふせんにを
紅ぶこえをうちぬをををぶよ紅うゝろこをとゝひてはゝ約かよ
ひにをとこ夫ゝ文領大貳夫敵てぶの方引具し籠紫ゝ
ちんとするいよゝ武末摘をいさをかんと思ひてぶの方末摘の
四方へ来ていろゝたすめけまてと将源氏たのこをうけて
聊さあのひびさゝゝぞ侍従の君をいざかりといふぞうも
侍従
ゝめけとのを也貧しをた情悲ちぐさをてさゝふ水はゝゝぐと

思ひ形ゝ小の方ゝゝ人夫侍従を籠紫ゝちんと
いふをむけふやををををさ小神ぐをなけまぶ我ぶゝ
ぶちゝて梅へをひゝつゝけ長さ九尺ゝ丈をけふ者の
香の白ゝぐりをを抜ゝてをゝせをふをて末つむをふ
たゝまぐをすををのうゝ思ひのふふかをふをぬる
をて法をふ所ゝし侍従
玉ゝつゝ結ゝをゝ所ゝ少道の白の形とかけてちゝの葉
をゝく侍従ハゝくへゝをぬいてぐつゝとふがゝをよをにも
歌ぬをゝ少を清ゝををも朝日夕日と毎せぐ蓬莱のかげふ深く
積をて雪ゝの白山の色をしてうをさぐゝ年もゝ色りぬ

胃の山源氏ちる里へおりたちて面みゝ降て時雨ふる
夕暮の月新面白さゆゑ山ふかき松ふ葛の咲のりて
難地も分まゝ〳〵まゝ大路へ礼ふたる家ゆゑ山後ゝ
やゝに物ちえ多ひて思ひ出せず米橋の山のもとあつまふ
のくりとれふ山を我ゆゑ雑面ゝと思ひちれ多ひて山を
とけまゝ惟光を呼ひて先人とふりてのくと紫内せよと
ゆゑひて行ゝ山ふ内ふ米橋屋敷寝ゝ後へ多ふ変
常陸の宮ゝえ文ゝ出ゝ右衛門ゝ出ゝて米橋花
ふさ人を意ゝ袂の涙ふ紀ふあれゝゝやどの雨さへそふ
とゝすゝ人ふ文ゝ惟光歩内すまゝ先ふのちゝふと掃せ

六

大武の小竹ゝとゝ奉ゝ小袖を見ゝ人おどゝ後ふ惟光ふ出て
のくとゝせゝ源ゝ出ゝ落ふ遂ふ家ゝ山後の人ふ馬の
ひちにて掃ふ本のひ家ふ多ふ山ふ多ふ山ふ多ふ
ふひて行ふ人ふ文ゝ源氏
見ても我ゝとゝ道もなく物ゝ遂ふ文ゝ
とふ人ふ人ふ出ゝ蓬生
山ふ方ひふひて後ふ多ふ宮ゝ山ふ多ふ後ふ
後ゝ後ひて育ゝ文ゝ大武の小竹ゝ紫ふ後ふ
多ふ物ふ侍後ゝ山ふ人ふ
船ゝゝ思人ふ

七

せんさいや

伊豫の介さいけいの幕末の巻に曰く源の四郎人あり伊豫
の国の海を見渡すに桐壺に帝かくれさせたまひて又の年
常陸の介成て空蟬を引具してくだりたまふ源次郎
なる人ありけるを成て空蟬を引具してくだりたまふ
源を石山より頼みけまいらせ京より常陸国
に紀伊守なる人ありけるを石山人清水寺より常陸国
道みてまゐりあはんとて逢ひ給ひ空蟬を引具し
大勢なれの日をけて源の御車に引逢ふ関山より相
如まれ車をいそぎてかくしてかくしてかくして源の公の内
もりて空蟬を乗せたにのあひてまゐりて出川京より海のあひて
後空蟬の弟もりて小若今の侍門作とつをえてよせて
空蟬へ乗せたりさて源
わたりのふねあまたをたのもしもおもうひかりや沒なりぬうき
四のへしうたせて
はるばの関やいのあるせ紀なれがきげさはがさ中とやくらん
とうみて奉まりのうとふ式常陸なる老れたをもるみや
なやきけまいの子侍へ源へよく宮川なるすぐさまとうへ童
うたせてこの常陸なさへ行れながいこの成さまみの成行むと

歌ゝとゝろにも氏人のためあふ物ゝ却ゝ魂をうしろめ
けまでに思ふ住せぬ命にてきこえうせぬ子どもゝ
相ゝつゝげまけまで継子孫母の中れまで事に寄て若ゝ紀
事出ゝるゝ恨領紀伊国熊野ゝ墓ゝ出ゝ来れ給ゝ
空怪恨しめまて尼小成紀の御ゝ出をみとひて
尼小成是給ふ海ゝ若ゝれゝ物是の齢久ゝ何ゝて世を
つゝ是給のんとゝ入立後ゝ世是

繪合

澪標の巻小六条の御息所の御娘秋家と帝へ奉ゝ
女御ゝ世ゝと定め給ひゝ秋家氏巻小入内ゝ朱雀院
氏秋家小御ゝ思ゝ引ゝ帝へ奉ゝ世給ふ
朱雀院の御ゝ絵帰ゝて源ゝ秋家ゝ御覧ゝ給ふ
紀ゝ入給ゝ帝ゝ御母後ゝ今ゝ入道の宮と
よゝ御ゝ取ゝ世ゝて秋家内へ奉ゝ
御入内の時朱雀院ゝ是帝ゝ道具薫物など
給へゝ帝ゝ氏巻小十二歳ゝ成ゝ秋家ゝ世二三ゝ
とゝ行ゝ人ゝ道ゝ帝和ゝ
世ゝ勢ゝ頭の中将今ゝ権中納言ゝ
弘徽殿の女御ゝ帝ゝ御姉ゝ

みて白きをうしひよりみつどいかだとよるも絵をゝのませ
みひて御こうづかいをとりくわせ給ふ殿上人の中ふも絵を
かくとて宮ゝ玉日思ひ出ふ武部家絵とかき給へるを御ふ
とりて梅壺へ再ゝ内うしるをふを弘徽殿の帝父橘中納言
笑みひて面白き絵を集て弘徽殿へ持ゝ内給へば帝
見給御涙ぐみ秘密へ物てけてこせ給ひんとせき勢たまへば
弘徽殿なゝ海じみひて公よくもの目ふけ給ひぬを
源氏みひて見とる海をき事也古き絵どもをくく行
なゝんと奏し給ひて書棚のさせをひて紫の上と語ふ
撰集あ給ふ長恨歌王昭君などは絵いかのまてふ物ゝ

それと后のきあふいむるなれば見とがなゝじとて撰除
みひて御覧ぜて画せ給ひ一絵をゝ出ゝて古の例いでふ
紫のふふを見せ給ふあのまふ物をゝろけまがとやくこせ
給ひて紫の上
御ものてあがめゝよりのけすしうをかきてをみえ
とうふ人が源
うれめゝてをかうをもかうをもみのくふ四へうる源
源のく絵を集めをみを御ひて持中納言ひとで軸表紙結構
みて弘徽殿へ絵をたのつ内へ三月十日ごろ内なまを
宮ゝ内ゝ紙をけどのよ面白きふ内裏も節会のひまにて

四のくらしをんが国しくに氏繪どもみて絵合してなむ
とて秋宮と弘徽殿とを左右にわかれて絵ども
持ちてのぼりたまへり秋宮の方より
右衛門督の出でたまへる絵は竹とかいて弘徽殿より
うゐ山ぶみ持たまへる也次に秋宮より伊勢物語を弘徽殿より
上このみをいとゆゑ氏上このみと以ふ物語今の世ふるまひ
入道の宮判者せさせたまふ源も寄りたまひて見ほどもなく
ろきに帝のうゐ城みやびの四まきとて勝まけを定むとなむ
朱雀院よりも秋宮へ四絵ども奉たまへり勅使ども
中納言も侍従へ寄りたまへる日師の高もとまりたまふ須磨の
巻まであり師の家と同じ人なり源の四巻あり氏師の高絵判者ふ

師付きたまへる絵ども合せてよりて斎宮方より源の須磨を
うゐ山ぶみ絵を出したまへる所々まことに面白き事類ひ
なくて左は斎宮勝ちたまへる也ひとびと数中納言和琴
師の宮箏の琴と源氏の琴琵琶の少将の命婦と以ふ
女房弾くこと面白し氏師代より後よりいひ伝へ
させたまへるかくはうるさきことなりとなむ
させたまひていにしへ紀盛の内侍代世にあり源も世代常
なる紀物語をしてみるに今少しとあるべくあるべき世を
宵のうちとおぼせば山里の長閑なる所にて所堂をつくりたまふ
公達を捜したまふ方々にて月ごとにやく世代すて

[illegible]

松の影

二条院の東北(対)の方に源の君住給ふ西の方に紫の上の居給へり
今は源も紫のうへと一所にのみおはしませば我御住居のひがし(東)の
方を普請し給へる程に花ちる里の名をかこちけるを聞給ひて
人々を住さんと思ひ給ふ御花ちる里を御覧ずるとて
御心を尽し給へる程をいとゞ年久しう
四季の行ひにつけて人中へさし出んもいかゝなりとて思ひそぐ
ら浅小入道父の北の方祖父中務の宮と云人の住給ひ
[illegible]井川のわたりにかゝる所に住むとて今は留り居
ぬる迄にて行末長くあるべきと思ひ出て留り居給ふべく
此道にて都へ登る所に大井に住むと思ふよりさやうに修理
せようといひ付て給ひ付めく思ひより住なれと源へ申けれ
ども其事と思ひ出給へる人々入道の猶と申んを
公ども[illegible]入道の申す事と年月経ひけれ共ひとうれ
[illegible]ども新々神の上に玉のやうにぶきを見て第一こけら
姫君小別当殿悲しき源よりおぼし給ふ所へ車を数くみ引
つゞきけんもとくしけれ共おぼし舟少てのゝしんと云ぶむ
時しも秋なれば云ひたる物あり給ふなり入道

行先を遥に祈る別路に絶ぬは老の涙なりけり
門出なれバいまくしやとて涙をおしのごひ隠せしかども
尼君数年住し一所を振捨ざりけれど今はと別れ行る
悲しう見えまた明石君
諸ともにみやこの出きし此たびやひとり野中の道に迷ハん
かくて舟にて出されば追風よく程なく都に登り見ぬ大井川のほとり
なまじ明石の海づらによく似て所かへたる心ちもせん源よりの人いとのハ
されて浦わけども物へて行也源をたち云なくわたりたら兵ひ
なへど紫の上の心をかねて今くもえわたりたまはざ大井川へもまぐ
なまじバ琴をかきならしけるに松風吹合せてぞわりろけきまバ尼君
身をかへてひとりかへれる古里に聞しに似たる松風ぞ吹
とよみたりし此巻の名とせしなりかくて源氏君は思ひて姫君を
見ゐなから参りたる事をさしきる時の浮ならし三つに成給へる
清きことなど思ひ給ふ御子の心になふ我ある事の外こそ源のおし
なりし琴はそのことをさし出したまへば源
契りし事にかはらぬ琴の声しらべ絶ぬ心のほどは知りや
清く見えし給ふ
かはらじと契りしことを頼みにて松のひゞきに音をそへしかな
二三日おはしてけふの二条院へ帰らんと思すに殿上人など
数多小鷹狩して鳥を持せて来りける人々が今日はやはらかに

酒宴遊び大こう紀まいり内裏式中の物いこにて今日
明く日也源氏内りんと行せみつ月見を給ふ夕ぎりこと
あづまさせ給ふ夕ぎりくとゆせばうつれ院へ序後好り御製
月のまむ川のそこなる星ふ様の物げいけどけ物こ
ゆきくし源
久堅のひかりに遊さ名のみして郭公雲もとれぬ山ぢと
源二条院へ御目給ひて紫のうへ姫君のもと御目ぶたる
後日物さ給へば女御より紫のうへ賞ひて
物ごとてうへとけうへば我ひかりみてゆづりんと知げ申源大井ふ
わうもあるものけうしう後撰の御業の念仏よかとけ
月ふこ変ぐうもわうもあるさごの御業とふ給合の巻より星
長宋物を見えて御雲をつくる給へと好る御業なり

落雲

夕ぎふ物行まに明石の御方も大井の住居院しう思へ
源もかく往きくてを再わう給ふるあび二条院の東へ
移ものとけうへど今源の姫きも道遠を少と思へば姫ぎも
なり迎えて踏くもへあるつりむと思へばうのらん
ものいひど姫君をこなみてそこ住るもかぐ二条院へまて
ゆき紫のうへけるにせんと思せど明石離ぐ悲しきうへ

ゑんぐふ市をえて行りで氏姫君のそうあるさまをふし給へ
べきと思ひ給へ源氏物語の明石の巻ひたすらに数ならぬ
身にそへなきもの姫君の御あるよりたるかぐ二条院へわたし
給へむと笑ひあり男たちねど姫君ゆも袴姿あるを雪霰
ぶりに紅ぶりぞさ海さうふ姫君を抱たくろひ給さくし給
つもる雪の明河の氷など見やりて二条院へ姫わたりあるべ
めるこゝあるに日を待てゆふ物をとなく思ひんとて打泣て
明石の巻
ひかうゝ

雪深き吉野山の道いとれずるも粉ものよく行ゑびして
とけなへば色はと

雪姫ゝさ吉野山を見てもこゝのみよあとたゝめ
氏雪ゆゝとけて源大井へ日たりゆ人を出ふゆ行ゆけて
姫ゝさに姫君のむゆ物ゆ思へ物ゆ思ひ物ゆ思へ
見びゝ姫君とうゆ行ゆ思へ物ゆ思ひ物ゆ思へ
よゝよりのみて明れ高ゝ思ひ人を推量を給へ
ざゝ
矢山みて野ゝ合点せゝ給へいよゝわゝ
姫君ゆ行ゆ公なく御車ふ乗ゆ乗ゆ
母君情さて出給へ姫君母君の神殿ゝて
ひゝゝ思ひゝゝおゆゝて明石
未遠き二条の私よりさわれ河ゝ本ゝ見給へ

とて泣給ふ源
おひさきしれぬ松もかれは武蔵の松に小松のちよ残かへしん
御めのとを少将といふなきさへりて御とゝせあまりが内にて
内侍子となりしちよせは守り刀に付てまいらせ給ふこれ源二条院へ
お帰り御ゆるしなき姫君は道にて寐入給ひし残りをかきいだかせ給ふを
泣く／＼おぼしめし。くゞ物まいらせなどしてみえあぐりしものをこざと母君
え給はず残り給ふ人が見たまひて残りて慰めまいらせけれども源
内侍はきそ物のれえさひしさのうちにきそ悲しき／＼人は姫を
おかへさとは紫の上のもとへと出させ給ひても口惜しく思ひ給ひん
さかりし人をよみて泣なくしなへと大方物にかなしさもたらえ

みて紫の上のもとにてよく／＼おぼしき給ふ人が思しかへしものこえふかきを
おがりてのちかりけれあつかひもとて推ひ参らせ年の人へまて
おほやけわたくしさで物さわがしきに残ることて大井へ源かへり
給ふとて出給ふを姫君御ぐしぬぐさのすそにまとはりてなきて
の人は源あはれのえまこそとの人がむしまされのよ
母ともさふあきなき人のなくがちにて何かせまいらせんと世をすてと給ふ
内侍へし源
おもてそこあれのさねこえ中くにきちゃかし人にも物く
紫の上は姫君のいはひをいとしきにかかる小姫ぞしくあぐれどもなく
かくに立つしむつかしん家さへ別れ道なくさひしくなくさきの中を

新たにかりもうけて内侍より入道殿乳を含めたてまつる
源ゐ大将みて姫君よりもどもゐ給へせめひ二三百匹留て侍せ
給へ是こそ法皇政大臣のれ給へ源のむ〻はかの冨蔵のうへの
御父也摂政なれば御ども拾〻歎き世の人もとゝ悲〻
をろ源を御てにをとうの母を世の函も氏大臣よ攘ひてこそ
隠も有しこの今よりのちげ門んとあげさせみこと年いまの方
世の中さうがちく内裏も物の告ともいつ有まりそこにも
常にかとうおろ月日星のまゑどみこて世の人驚くもと
まし帝は御母入道殿後嵯峨の高あやこめひて三月にも
宮く殿〻せ給へ帝も行幸はの源も公の限う紀も入〻せ

給へどかひあるこて三千もよりまりまなどの濃入やこにてまく
せてゆふ御公ぞこえはどのふよくおのしけ忠が納めをるみを
世の中ゆすりてをこ悲〻をる源をうゐにをたの方の
御歎きなれど御公の内ふをかまく拾〻出るをとをみて
引籠居給ひて一日泣くし給ふ夕日の新ふ雲の薄く
ゆふ公さたる我御袖して源
八日さん星ふ寺ぞよふ薄雲は物見ふ神よりこそ御ゐ給へ
とひとうがら給へうは氏にはう薄雲は紫と系図にも
河見御ふこゆをも見て帝もの公ぞそく拾ぞと入道の宮の
御母宮の御はう御行はは師ゆてさまらひをる僧都は氏法い

よく内裏に侍りけるを国司にせられけるとぞ
なくなりぬる時より帝の御家より奉りて侍りし
行幸どもくとぞうかゞ〳〵強くなりつゞけて行幸ぶゝ
侍りし帝源氏の御子にて相の御まうけ入道の宮の
那須ぬやしにと式部卿の宮の御娘にあひしにより志
御父ゆゑ御ましますとみうどもせ給ひて只人に出給へり
少人天とゞ名をひとへく世を強しく行るとと奏しけれど
帝ゆゑてなるの知らせさせ給ふとれよう源を出給ふた
むつまじく思ひ給ふさせあひて御こゝろ思ひてあり也
相撲ぶの帝は御弟式部卿の宮もうせ給ふより奏しければ

行幸世の強しに紀を思ひ歌まて源の人ゞ賢きふのこ
はけく御位を譲りんと相ぶしてあの名ゆゑ給ひて位を
譲りんとおもへど源うけひきなく牛車ゆるされあひて
宮内しに行く牛車の禁中へ車にてあり〳〵出入りすると也
源の小納言は権中納言大納言云ふ歳て右大将のけゆへ給今の
春宮入内あり〳〵齋宮源の御方殘御さとにて世ころ内
より出給へ源御対面の折〳〵はとなりの序ふ
春と秋との心づまを面白く思ひとと秋ゆゑふ弱ゆへ御母
御やとと系のかく遊ゆ秋を秋こそ好ゆ遊ん
そひてあつうう行ものゆひ云葉より秋ものゆ

中宮と京國ふあり

朝かほ

萩の露の寒ふ式部卿の宮が一生涯姫宮様が加茂の
斎院御退下被遊て行りゑ源もゆかしう思ひ出ぶかしけれど
祇園社立ゑ行ひかど神の御会を悔まして通ひふくれ行り
ゑ人が今い知さすく昭さ笠ゑ祇院の若ゑ家の桃園の
宮といふ女王の宮といふの式部卿の御妹祇院の御母なり
御叔母なり是とひとつふ桃園の宮ふ住ゑ人の源氏女王の宮を
訪ひ奉りとめつけて再へわる程ふ女王の宮の源の出るにも

御ものゑり新宮ゑ入て齋院へ源
月ゝ行の嶺の花の盛りの面やしのん
式部卿の宮の祇院といふ御ゝ祇院
秋ゝて雲井離れ知もとゞれあるうれしさにうれ新宮
人は口ゝ内がふさゝのあまで祇院内のげゝて女王の宮も
源ふ念ふせられふ源と齋院ゝ御ゝとこあまがよ紀ゝ間也
ゑん宮ゑの様ゑ御ゝ祇ゑ紫の上笠ゑ御ひて御ゝさも
御ゝが御ゝゝもあるべきゝ御ゝゝ御ゝまゝあまで家ゝ
宮ゑ人ゝあるゝ月ゝに今ゑ姫ゝて生ゝみゝ御ゝんと
公者ゝゝ御ゝせど宮ゑ出ゝゝゑゝど宮ゑ対て源の出御ゝ

さあるを月ゝ〳〵どうもすまだあがるまんぞりにてみやのくるまに公
入多人〳〵世の人かつてみるまぢとい例の里ふるのなりを恨しう
虚
はぢ寺源い序哲東孫はつくろひ女房高の悩うちみを
源ふ行と紫のうはやのえ多人〳〵どうもまんやもせび姫君をとりて
あそびて和ゝ源も桃園の高へわるまちひてまち女房の高の
四方にて序物ぐるまちみ女房高年寄多人〳〵むりしの
事ぐもうまことたさあり〳〵人〳〵が源い出耳にも入ゝ弱つて紀
女房高をけうびやりみて年寄行まぢ夕まちひしてもの
ぐるもせ〳〵れどとて姫うふ弱あくいびきの苦すまぢ
脱ひて立ちうよう古めり〳〵ちうちぐさがりにて朱う者行う
弱あり〳〵むと物ぐゝは紅葉の賀は巻よ遊あひ〳〵源内行内
すけあり尼小敬て式高は高のまとい例みまぐ〳〵ぐ〳〵
なぐ〳〵〳〵んとも思ひあるべむ〳〵はうぐも弱うあひてそれより
歌院内四方へ物りて例のさ角〳〵に例ぐ〳〵どりひ
あり源も編小高俺みみは行〳〵ぐ〳〵むり〳〵は絶ゝ内弱へど
弱まあさ四方そてはー也それよ頁て山まんハ口をとと思と
みぐ行はける紫のうへ〳〵さよろ例よ思ひ孔まぐ〳〵物のづう
遠ふも出けう紀源弱みぬ内けー紀こそ立行ごとけまぐ歌院
みい世のはうあり〳〵る紀ゆまぐとり〳〵行〳〵さ角小立行みる
そのこちいそてとあまてう中ぐ立亜みふと一日りさう

あぐさ
麻の袴ふみ雪踏つゝ行とのわらう面白しみの表の
笠ゆゑ月小雪の光合つゝ空ゝ分行てゝ行もゝろれ
さ床まで紀寺めに伏ひ行くゝ人の公はさゝとて御蓑巻あげ
させ給ふ日ゝ伏ども相ゝて雪降ろがゝせ給ふ給へゝ
時ひて先日行ゝ大さふまろゝさんとん源の一とせ入道の宮
中宮と申ゝまりげる氏雪共山郷せ給ひ行ゝも月家多く
えんふおのせゝかど出公ゝえ四ゝ月ゝ行れよ月
月ゝ出ゝのゝ紙公ゝえ四ゝ月ゝ紙四ゝ月ゝ行れよ月
四ゝ月ゝ紙公ゝえ四ゝ月ゝ紙四ゝ月ゝ行れよ月
給ふと思ふ程て四月ゝ給へゝ月
出めに出ゝる月家氏衣袴も高ゝて源
とけて袴ねねさめ沸ゝさ給よよもとぶれつゝ高ゝ月ゝ
程の何ゝる日まみて出帝ひあゝど給へ月

紙と名

年四ゝ月て入道の高氏出一めゝ出ゝ帝を始奉
月て殿上人など殿衣をぬゝげ世ゝ世の中乱ゝ知月新月の
衣ゝ紙も蒙ゝ紀ゝとあり加義の祭ゝ月日ゝ決定ゝ
源ゝ月決定ゝて御ゝ紙ゝ出ゝ月ゝ出ゝやゝて姫ゝ
時ゝ月給ゝ決定ゝ出年もやゝ蒙ゝ月ゝ通姫ゝが今い

居り給て行ひをせんと思ひ給ぜど源の何角と給へ給へ
ものうち絶ぬ物ゆゑの却て公演しく氏うどを通してと思ひ給へ
ぎまゝひ給へり蓑の上の中もの若君を夕雪を
ものすけ二月給へ給へば源元服せき給へ給ふ四位ふあさんと思
世の人もさ思へるふ引うく公位よりあ〳〵が世人も驚き紀男
源祖母の大臣の孫月濃まして源ふ源背面の時
あまり濃さ位みて口をゝう位うと給へ給へが大臣は道を
ちがへ給ふさんと思ひ位うて〳〵位も大位ふなゝ位うぐ
ものふみうどは位位みて位ゝ物ぐう位うけ是が世の中はあり
さ海ともう位〳〵位うも廣さ知を〳〵絲が琴姫えの

ちゝぐふさく公の物よびぬるもはにて位うはのな紀親ふ
位さうるみもいとものう紀わざふう次第〳〵に男をゆくも行未
公をとふさうる地源の若君とて位うさ位うるくゝ給へば
参り給へみて是を文月方をくるゝめんとおもひ位〳〵じ
去ふるもて位を位ゝ世の物ものうと〳〵べきうるを習の
さんと思ひ位うるゝ〳〵紀うをあゝひなが源逝去の後も
如月ものうべゝと位のえゝ〳〵月夕雪方是を文の位ゝ大臣は君
冠者は君といふくるざいくるんじやとうるゝ也源の若君
とて物を用捨有へうべとはゝひて大内紀という学者ふ
祝ひ物ふ祖母大臣を月ふ三度ゝうるを寄りゝが海して

あそびわざあどもの人なと源さうしくれなべてとうてい
りてまく学文とげて和やまと紀ゆとあるんと一入情を出し
給ひて史記なといふ文の只四五月に漢ざて多く見氏学文
よる見るもくとよりの人くに修学れ道に志ざさまがいよく
世の中に方四見てあるく変人多く成ける絵合の巻に入内
あるべき歌合なるべきひて見るうい中宮といふ紫式部の娘
兵部卿の宮式部卿に家に姫を女御に参せ給へる
源大政大臣に四の姫を女御に参せ給へる頭の中将に右大将娘をもつ内大臣に
あり給ひて権政を濃うあ人ようすくやかに学文を好こあべが
権政職よく叶ひ給へり四の子侍十人給り次第に官位進すこと
給へる侍姫ようの女御とみひとり和りけり氏姫君を
招ようあり四母に梅宮大納言殿に方に方なる給ひけり
姫君とが内大臣の侍ようの大宮に祖母に不和て
特ぐち給ふ多事とに以ことこと也多事に十二姫君に十四に
姫の雅さ公に不五に四ひかり給ひて行のぼうこと
ようと紀ようとけまで大宮のせいすぐさるのとも思されど二人
あるこ侍孫ようて内ように多事をの姫ようくに以ことをこと
以ようの人ようとも平こちくに侍ようて行ようて立ようて
内大臣内裏より帰りて大宮に和りて四物がうもし給ひ
姫君に出て出琴あるこ以ようこ機嫌ようくておりまん不へ

夕ぎりも来る是なんが是又ふ面をはくてゆみとよ・はくい
ひくさわぎ絃もし給へ是てふを深き心の侍りを行るとて笛を
吹り給へば是を面白く吹あ是は湯ばけてぞ物ゐどと来りて
内大臣のりあつよ人のさくやくを給へば夕雲と姫君と心を
かりし給ふて絃ふされば雲もめくはるもとかひて見ひ一かど
大臣のせんし給へんと思ひ上に夕雲と弛色の侍あ海はた
のりうもすも侍せて姫君ふ琴付あとおぼしふ絃をとく
ゆて物り給ひ又二首しておりて大臣をうるとを絃ふ上うう
ゆしをも夕ぎり是来りふへば大臣式の絃ふれめうて内大臣の
さうげんあるきうゆを夕ぎりに思ひさせあへ是夕雲ハ侍とぐ

物思ひりとて姫ゆへど寝れあひずけうぐさ首尾もやと
琴とおさ出て姫君の姫ゆふ来りやそひて笛ゆへど
姫君を思ひ乱れ来ゆ目覚て初りよ屋の時ケうけまぐ
雲ゐの屋を来ちやと口ずさみゆふ式部卿の宮深き雲ゐの
屋も来ことや時せぐ物の悲ひ来むとふ方ちとばあり
是より式姫君を雲井の屋とふ内大臣の御娘弘徽殿の
女御を内大臣ハ味を給ふ春宮へ参て后よせんとおもの
春宮へ源の中将娘来りゆ是とて中宮よ敬ゆめぐ
女御まて行んより夕雲ハ小の方にて初りせんこそよめ

さて人を聟ふせんふ文さるまゝ人もあるゆゑ紀ふ
内大臣のかくもふとて大宮も後立せ給ふ給へ是を伝
聞ぬ源ハとゝ年五節ハ舞姫を内裏へ出ふとて意の
物を東橋へさせ給ふ源ハ惟光ゟ姫十三四ゟ見て物ゟもよ紀を
出さんとて舞ハさゝふて宵の一節ゟ過て源の内へ入給ふ
ゟゝろミふ舞ぜて清涼殿へ帝ゟ蔵人所ゟ
姫て居ゟ紀を見ぬ紀て又ゟ見ぬゟ年ハ紀もゟゟ
ゟ宮の屋ふ紀ゟゟ（ゟ）が出つけふゟつゟて名ざり
ゟめふまゟゟ姫の家へも行ふ紀ゟゟ
ゟゟ人ゟ見ぬ節に源ゟ内裏へ紀りて又紀ゟゟ

源ゟ舞ハ姫ハ内ゟ五節の舞姫を紀ゟ出て
今ハ源ゟ出年ゟ見ゟ五節ゟ光ぬゟんとゟゟて源
乙女ゟ神さびぬゟし天の袖ゟ紀ゟ影ゟ見ぬゟ
内へ一五節
かゟゟいへゟゟゟゟゟゟゟゟ日ゟの袖ゟゟ
ゟゟふゟゟて巻ゟ乙女ゟ内ゟ雲ハ雲ゟ屋ふ紀ゟゟ
惟光ゟ娘ゟ紀ふゟ屋ゟて此姫の手ゟゟゟひて文ゟ紀
ゟゟゟゟゟて紀ゟて見ゟ者ゟ惟光姫ゟ出合ゟ
逃て紀ゟ引ゟゟめて何ゟゟゟゟ影ゟめて居ゟゟ
ゟゟ紀ゟゟゟゟゟゟ人ゟて惟ゟ女ゟゟゟ

文さうなどはかなりとて惟光をばげんようく打笑ひて書き記
はるかなる物語の間に年の暮までめやすくにうつりてふみ
とて女ごもにも見せて笑ひ給ふ式部卿の宮の御人数多
思ひしの何ようよりも紀ようの御方ところにうつりそめ
琴を習ひ給ひしをもて集めて育ミ給ふ子の事ば
御事ばかりとて恨みの文ばかり今をとも御祖母大宮の
給ひしかの元服よりの源の内のおとにも若の人源氏ちる星ふ
敢へ給へば女房も御母方にもかの紫上の御方にも
疎くぜさる物ふ家筋ばかりと密通あるもいとど文ばかりも
内ゐ公あるべきとの用意なり年かくれて二月廿日ばかりに

朱雀院へ帝行幸あるべき源も参り給ふ人々の手遊の文人い
ろさび唯人の才賢さ残なく題を給へば詩とばかりせ
給ふ人々を試させん方なくそれぞれ楽人召
御遊とぞ言ぬまでの御方々も出て音部屋の宮は琵琶須磨
絃合よ帥の宮といひ帝源の内の御琴ばかり内大臣
和琴笛琴ばかりとも朱雀院の琴の源弾き給へるさま
上手ばかり勝まさりて弾き給ふ式部卿の宮の琴なり東
ぬまで源を御ばかりさ御ふ大后の内の方へ参りて移り給ふ
ばかりへぞ后のもり源を悪ミ給ひしかば出て悔しう
恥しう思ひ給へり秋の除目ふ人々方位後ふ源を六条

前弘徽殿 朱雀帝母

京極わたりを四町をこめて家をつくりあり六条の山息所の
家も此四町に入て則浦浪秋好む中宮乃浦住とて
せさせ給ふ八月小六条院にてはらこ海一日の未申の
町を中宮の御方とふしてはなを刈そめの御家也巽の町は紫の上
此御方海を山を庭に良はなつ町ふ花散里乾の方は冬の花たち其
間くの廊下にて紅ふ紫のうへ春と好このみ給ふて
梅櫻をもとうへて春の本宮殿にして池をほりせ給へ
中宮の秋を好このみ給ふ山をきづく紅葉ひろ木をもとめて植給へり
花ちる里乃浦とをぶ吳竹橋植給へと植てこれより紅よ
ゆをあ月者の山雅ひの方を東の方ふ馬場と梅くせふ

あをとよるとこそ成渕へてきてとせ給へ夏の山のとをぶ
あをはるこそ紅ふ紅ゆ松をのみ名をもをぬ吉山木をも植をを
夏ゆ彼岸の仏業はとと花地を里てなふ稲ゆ植給ふ中宮
ふし延て植ゆ稲ゆ給へ時しも秋なれば中宮乃山庭
ををいとゞ秋をしろし散あゆ花をみぢを山笹乃姫こふ
ちをさ海ぜて入さ給あひて紫のとの山をくとをもせ給ふ中宮
ふゆ雪まつをの方家やどのをみちを風のつをみぢふこよ
浦のへしの武をとはをさを苔をしを岩のかをちをして
女業乃松ふ欲をを好給ふ紫はをへ
風ふちををこそぜの四ろしまをの岸を岩〇の松よかをてをを月ふ

何ゝにかはこの数なりぬ年いとづゝふ梅ゝにそよろ
ぶべくれうて十月ふ梅ゝ絵入

玉かづら

源氏年月をぐ〻見ぬまどをのうすわと迷ひそぐ
今まて有まゝぶ式ゝ部ひ見こ神に内ふせむゝをとは
をゝう相ぶとをぶ内ふ侍ゝ女右近を源ふ高仕して
紫ゝふ侍ゝをぶの養ゝ姫君の父ふ源の内ゝとこ
なゝゝ小弼ゝ以の中ゝ今ふ内ふ侍ゝ式姫君こゝゝに年
をぶ負を五条ふて源を遊ふ極ゝくらせを源ゝ妹かつを

乳母

侍ゝて右近をを夕負の乳母のゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
西の京ふをゝ見ゝめゝとをどおをぶ内ゝ侍ゝ侍ゝ
ゝゝ神仏ふ祈ゝをで少おさよゝ内ゝぶせん。をぶ式姫君
侍ゝ内ゝこゝにそぐてんと内ゝひて内ゝづゝ有ゝ内ゝめゝとのをとこ

夫

つゝゝ内ゝ少貳を成て書ゝ内ゝ内ゝ式姫君をを具し
をゝて舟ゝ京漕出ゝに面白ゝ浦ゝのゝ紀をゝんてを
をぶ内ゝふ見せをゝでとゝ内ゝひてめゝとの娘二人さゝよゝて泣ゝり
ゝゝ内ゝむゝをめゝ内ゝ

舟人を泊をゝをゝの和歌浦のゝゝ鶴げふ声の笑ゆふ
ゝ内ゝをゝ内ゝ侍ゝ沖ふ和てゝゝれゝづくふ声ゝ言ゝん

紀氏の國より出て年月を経ぶるふ廿貳の任にて ぬきん
上京せむと思ふ日たる威勢をあさ弟に道のうどとく
さけまどひつよあるとうひて出ぬるほどふ氏廿貳を紀
病をして死ぬんとしるふ子をとはひうにもして氏姫君を
京人のぐせをまう内大臣藤原もとすせまりて公家元のぶ方に
あ[illegible]まれ田舎にをいめさにぐと三人の息子に遣云
をてはうあく敬ぬあるまふうあしてぐひ京やうみ
京人のぐせをまんと紀ふひうをげとを氏廿貳と中ひうさ
國の人をんてるにてみれば世ふ敬ていとふひうくはぢ
強まて紀ふひ年やを強るまに氏姫君世ばうまふあり

文をひのうう密りにひとうひうを紀を待ひやて文ひうと
よるまひわうるうう紀さうてひうるういうはうれどうを花
ひうまふまひ人ふうせんうひいうひうと川ひうう主の姫君とお
ひうひ廿貳の孫とんふひうひやをせけるふひびの紀後の國ふ
廿貳のぐんとひひて氏はて威勢ひうひ紀者ひうを姫
ひてよ紀女をまく集あて拾ひうう氏姫君ひうをはて拾ひう
なるうひうを成ともふをを怪悪せんと念はいひうまて
廿貳紀氏へうを年てふ貳ひうをこどもをううひ氏ふ
けへふひ同ひやうに紀をひうり威勢ををせんとうひ二人を
合ひて氏人を奪ふうひと母をすむ豊後介とひう

むすめ二人の娘の父サ武の遠云を立てゞ〳〵でけるが
姉うまれ残せし只〳〵のたゞもして京へはゞせをまんとふ〳〵が
あれはこれとよりうりて紀州〳〵をみまあどふこせんが
をしく思へが鬼よ角ふいひ道る我大夫のゑん狂立てゝいでゞ
〳〵嫌のあふ某とそこも絡し紀州みを〳〵ゞ都方人みを
労むとい思へびよりぬ女ども我集め立てをうれをく思ひ
狂ふあやたちやはゞ〳〵ひとゝ紀ゑこにいりてをさゞ姫君ゞ
右乃伝ふも苦らびをてあをむとき海〳〵にひて生日舞入
せんと思へが武月を芸はをてみて〳〵むせをゝぶ宮月みを〳〵ひ
〳〵りて〳〵しぬ狂ふて淺合して〳〵やあ舟をのまへ姫君を

立ませをりめはと姉ゑこの奔娘ひとりの侍して狂る逃出て
はゞる〳〵みゞる我ゆみて遥をやゆをんと思ふ4公海どひて
和ゑし風ふく吹てあやゝ紀までゝ〳〵はゞりてひゞをの
離を立ぬ姫君

うゑ紀ふに猫のゝ侍ふくひゞきたの雪ふあゞも君のゝ也ろ
ゑゞふく京よはゞ里ゑ思て九条よやどりて若ふ姫君の右父
頼の中将を只今の内大臣少て概政職ケれが影後主〳〵ゝさ
紀まて知ゝ紀れが姉とゞ〳〵ゝ安ゝ〳〵ゝとも〳〵ひゞあ〳〵ゝゞせんを
思ふ程ふ秋ふを姫ぬ急角佛祈乃ふ祭ひこそ頼をゝ〳〵めこ
いひて八情くまでさせをゝ侍ふ右の亜云まゞゝをゝ

強あらたかなるにて初瀬に詣でさせたまふ姫君と姫つきまた
内より召されの日日めふとまゐり給て詣入て休む堂の
法師見て只今人をやどし奉らんと思ふ所に人のまゐ
つるを待かとて門をあけさせ給へうの所に人なりんと
思ふに小馬四つ引せてとこ女数多くて清一人あり
此人をば内侍ひ給へり右近と云女なる姫ぎみの
御めの前を見まどろんやうに出給ひたるそ
さて清てけまで此坊を居みて やどりの所を立
法師やどめやどるし籠堂の人こそ奥方の垂幕屏風を
つくりて右近を入やう右近いとたびまて寄ゐて
とふの幕内陰にとて居を招人すゑ人とて
此衆をとりて手つから積ひすることの新月たるやうに
なりぬ内まで不審に思ふ女の新これをみて
ちらちらとやとりて此女を見て家をばこんもうまうや
うて新をけ出せば女をみて右近殿みて居をとまを
殿に紀伊の三条殿をて姫君のめをとふめとと人の清一暮
屏風にて多く押隔て右近を呼て遣ふめをと年月のあと
どう語をて法こうしたる姫君佛新人まうたまふ
右近も此後一人来る姫宮にてくやつまを行くど御めとう
をでをくうい一けまで源の姫君といとんみも若一めとと

右近を始めとして人々をまねきよせ給ひ父内大臣敵にとりてせきもり給へと仰へが右近それいかさらんかぎりまで源のいつのふもとにてかり給へ
等出せ京にあふせんと考ふれるひしかが口源へ中さんとふ
一日市堂にて念誦しむ今のことをいひいとん弟ふあが流
ゐるとがどりせ川と仰ふたる右近
二ことの枝に立どと考ふ花の姫ろ川のべふ考とうまーや
所四人しー姫君
とりせ川とやうのうのたーなどもたふの遊佐ゐ考さへあがれね
ゐ平ゐやどを向ひてせて右近うへ見源ゐ中けまで收ひあひて
人ゐまねわさばーに別腹出ゐーー出振ゐまでお今と言もゐ重
ーを生みて迎へーやーにたゐさんとけゐふ先右近を所彼
にてゐたゐのーー給ゐ月出ゐへーーゐどもがふくーーけまで姫ーと
ゐーて紫のふふもゐるるをゐひて彼むーけ多新ゐ出ゐも
物ゐうーー給へうー掛九月ふうこんご市と五条の家へ稱ー
ゐをて入ゐどゐへ四ゐ若来ゐど稱へて十一月ふ源ゐ市方
六条院へゐう給へうー花ゐ星の後ゐふ良の町ゐすゐ世
ゐ則花ゐ星ふうーーゐ見ゐてゐろゐのゐをーへゐと
源ゐえゐへうゐてゐうゐ夜源ゐーーせたまひて
所對面ゐをいるうびゐるゐをゐく新ゐゐもうゐへ
それがめやすゐ出ゐ高ーくゐてゐーづきて兵部卿の宮

なごりの水を引こうとれなり式部卿宮源の内侍参上し侍る

よせて内侍参ひ申源

忘草うゑ置身はそれ成ぐ〳〵玉葛の絶すぐを見よとさゝやく

式部より是姫君を玉葛と申源の内侍夕霧の行末を入今の

中将也諸内とゝめ〳〵と思て念仏申さうの一巻丁豊後介が

公ぐ〳〵を源を感し給ひて脈〳〵紀の家人よりの事れ〳〵是

内の方〳〵より是我も〳〵と色を尽して織出たる物語共も

集たるを源紫の上と語ふ給て今そ〳〵〳〵四月の

内侍参来那〳〵せ給へ夏冬の巻小尼君の巻し空蝉も今の源

宮〳〵給ひて二条院の東殿あいの君住むらさきの尼の物語共

内侍の一巻終

若菜

年たち帰ふ春の二条院の内紀の数の〳〵ぬ姫宮の内さく

花宴の春の海にて対しく孫さきの六条院の内さく海

竹の〳〵中にも紫殿の内のさい春の内けし紀の君の

一入すぐれたる朝の内の内の内禮の人〳〵手引の繰〳〵内けを

夕月〳〵ちづふ殿の紀の源内の〳〵わるゝ海の〳〵

内侍参来引たくろひ出の内として紫の上をとひ内ひて源

薄氷とけぬる池の〳〵にも世の内ぐひかさ教ぐ〳〵

ゆかしくもさるかうへ

くもりなきゆのかぐにて式をすもじをあぞそろくみえける

ゆふさるれば日ごろの松をみせをかけて祝のんふ理(ことわり)をもとする日あり

源氏君の羅(うすぎ)ぬ物ゆかしくわうらんべわうらんべのべとも

ゆまへの山の小松を引給ふ明石の方ようそへて姫君へ奉るとて文ゆふ明石

五葉の松の枝ふ付て寄ようそへて姫君へ奉るとて文ゆふ明石

年月を松ふひろれて姫ゆかしさうのせよ

源氏君ゆかしくて式のへしゆふ自筆にて世ゆえゆへ人の祝を城(しろ)

給ふべきかこにもゆかしくとて祝言ゆへて姫君へ奉るとて文ゆふ

ゆかしくへ姫君

引ものれ年の数(かず)ども昔のすごろく松のねを忘れめや(ちとせ)

源氏君より花ちる里へわうらん給ひて姫君へ奉るとて文ゆふ

同じ世(うきよ)の町なるべき玉のづくへわうらん給ふ物さよげふ侍り

ゆへへ年比祝ぶ侍る祝ごとてゆへにかくみるこそなをえあはれ

ゆへをゆへとて祝ぶ人ゆへとゆえをひて見より明石の方へ

わうらん給ふ硯の箱ふ入給ふ・みきのしく双紙どもをちらして姫君の

ゆへへ奉るとて文ゆふ

めづらしや花の祝ごとに本(こづえ)ひて谷の古巣(ふるす)をとへる昔

とゆへ給ふ式源氏君ゆへて出給ふれば明石殿へ奉るとて

ゆへるゆへひて曙(あけぼの)の月ゆへ給ふ物ゆへ給ふ日比ゆへて

をとこの所家二条院へおのりて東北方の寝殿に住み給ふ末つむ花
の木陰などをとこもとりひろひあつめ給

胡蝶

二月廿日ころほひ紫の上の四つ巻の春の御宴はじめ給ふ
花の色々盛りなるころ御方の里より鶴の子引まゐらせ給ふ
御前に召あつめ給ふ殿上人諸司の官人召しあつめて
御遊あり給ふ中宮の御方の御遊びどもは源の四位兵部卿の宮ぞ琴
をひき給ふ御笛吹給ふ殿上人ども

始めは唐の御遊びなり中宮の御方の御遊びは
式部卿の六条の御息所の御娘源の侍従の中将などの
二番に御笛吹給ふ兵部卿宮琴を引給ふ
御前ざまに佛の花を見給ふ
白き御花の花瓶に樒をさして右の方に藤の花
瓶に山吹をさして蝶の形をつくりて
ゆらゆらとさかりなり

花園の胡蝶をさへやはやまの秋まつ虫の音にまがふべき
中宮の去年の秋なくなりし御方の入て つのり給ひ紅葉の
御賀の時の事なり 中宮

胡蝶ゆもさそはれかまへ出ありて八重山吹をへだてたるせの
氏物語にて巻をこそふと名づく玉かづらはいかゝ
よう変化のつ[illegible]ふかやうにもあるべき人の心ばせ海さも
引こもと思ひけるに思ひ出たくあらんと面白かり給ひてこゝと
すまひ源玉葛へわたり給ひ[illegible]ゆうの内多くも出給へ[illegible]
あとすめ給ふ[illegible]ゆうの内大臣の邸領政の中将殿名を柳未と
ゆふ玉葛を[illegible]ゆうの内[illegible]ひて女
知らせめへの柳未
思ひもよらぬ君のたゝじろわさかへの思ひる水のたゝみそねば
氏物語にもつる中れとも源もうるべのれやえさ給へど

下ちのようものとれかあるさんの口をとゝ思せぶ人ちとゝさし
ゆて思ひがゝ紀ちの思ひ出るひ出るとう玉かづらゆ
せんと侍しかば玉葛

ゆゝ歌

源氏今い太政大臣ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
にて[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
たゝよりゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
玉かづらゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
陸奥守兵部卿宮ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]

ゆゝしき御ものゝふ（侍）なれども所柄いと面白くみえわたる源
四郎殿にて武蔵守殿とぞ申すとぞ聞こえたる。あくまでもてなしたる
ものゝふ（侍）の時ゝ西にあたりて、すゑ所なきまでもてなす
時よりさぶらひの侍共の数兵部卿殿（式部卿宮）の御ものゝ
思ひておはしたり源中将殿ひかげを立てゝ
兵部卿殿（式部卿宮）の帷子（かたびら）を引出だしたるを見れば兵部卿殿（式部卿宮）玉のゝ
ものゝふ（侍）の人目にもてはやしたるに、源氏（かゝ）を美く集れる帷
子ふつゝかなるを引出だしたるを見れば兵部卿殿（式部卿宮）玉のゝ
ものゝふ（侍）なれども源氏（かゝ）を美く集れる帷
子ふつゝかなるを引出だしたるを見れば兵部卿殿（式部卿宮）玉のゝ

是ぬゝに赤色のゝ袴を源の四郎殿（源氏）と思ひ出でたるぞ
ゆゝしかりける。あどよりたる御ぐしの
兵部卿殿（式部卿宮）の四位をうごかすもとゝ
見えわたりて紫のゆかりとて侍ふ兵部卿
侍ふ人ゝ

ゆかりとも見えぬ出の見ぐるしかりけるかな

こゝろいせで身をのこゝろ比べ侍ふ人ゝ
見よ巻を名づけ給ふ兵部卿の宮とぞ
五月五日の源氏ちる里の住ひ
ものこゝろを引つゞけて。おりて馬場にて侍ふ

五月雨

どもはまだはつこゑもなかりしかばてのまへ百あまさつ五つにおりつゝ絵物
がたりなどよこのきて硯をかりて玉のづゝの箱紫にて見訓抜かぬ
絵ごとをあまたかきて物がたりしかばそらうてぬゝ身ようこのさ
ぶとあこがれを源氏の後人にて式双紙の中にをぐのゝがやうに
実ある人をいつゝにしたゝ又古今のやうにそゝわばをさして
はまぶさやいつゝぶぎをぐらひあさきものがたりをみて世ふ徒く
させんとはかりて源
見ひのまり昔物語を見られとおやゝもむかしるぞかぐひ見れ
ぬ人〳〵玉かつら
姫君はたつぬまどけふあうけ見式世ふかゝるおやの心を
内大臣の源の玉かつらをそなへづきうつを兼姫とおもう
物がたりに雲井の雁をかやうにもそあさんとおぼしけるか
夕霧とおもをかの一物語にくぬ人のはをうつして五節の
ものと思ひ出てそ一条姫と名付るものゝ〳〵ぶ告たゝせよを
宮廷にものひ立てうあり

とこなつ

男つさ日源氏の内大臣なる日出て源氏の内大臣の公達のうち
末の中将兵部卿宮をとりてをりて来りて人が釣どのゝよび
物ひて鮎あゆ鮒ふなど料理せき弱水漬あど紀とうをんて

それより源氏玉鬘の御かたへわたり給ふ柏木文さりげなきを
御供にまゐり給へり此前栽(せんざい)の撫子(なでしこ)の外にはよの草木は植ゑず
とて紀末に巻の題(あまよ)の名をさだめし時内大臣此玉鬘は我子を
あづけしかばゆくゑしれずなりしを思ひ出てのうちなり
玉かづらは撫の親に忘られなく思ひなへど乳母夕顔の源に
逢ひたりし事の其のままを源ふるさとへ出してまづかくし
給へし源
山がつ(やまがつ)の垣ほに生(おひ)し撫子のもとの根ざしを誰かたづねん
此巻に内大臣の御娘と名のる人あらはれけるが柏木の中将
呼(よび)寄て御かたへまゐらせよりはしめ家の娘ならんに付てげにくし

くちをしげに大臣の姫君とは思ひかへしことは恥しければ
今更すべきやうもあけれど今姫君などいひて立ちつ
或時内大臣今姫君の部屋(へや)へ見舞給ふが五節の君といふ
若き人と双六をうちて打の手さへかれは小賽ひの筒も姫君めき
給ふがかくて文んより御姉の弘徽殿(こきでん)の女御の御かたへ参る
せて女房ならばせむとの給ひされば弘徽殿はおもひて近江の君と
名つけ女ばうたちにせさせ給へりをしもたあさましき文かはし
人なり

かくり史

世の中は人のうとぶ内大臣殿の今姫君のうせさ
すると源氏世を捨ひて人ふたりれど籠りとん世をと宮殿の
さきこしらやうに内大臣の仕うこゆえんねうみと
知ぶ見ふかうるみと玉葛もゆうひてようぞたれど
なるまゝ琴やうにあぶ恥ぶ海ゆんみと行ぶ文の
夕べ源氏こうに見ひて遊ふ箱ともさせて四琴をへ
捨つるかとつけて近くよりみ捨ひて源
毎夫ふ三条の姫こそ多よりはまれうのみ有りれ
玉こうたう
清
ゆく春のさをふりてよ毎夫のたよりに書ぶ姫と知ぶ

人の時と思ひ行むと焼文ぶ行ぶ文ぶて弾ふ笛の音
なゆる雅そと同とせ捨ぶ柏木の中将ふりを雲井中将とい
恨ぶ思ぶ中将ふて恋ひ文ぶ琴みと謡き
恋慕ひ文ふ源よひ文ぶ琴みと謡き

賢木

六条の御息所の御娘秋好む中宮の御遊ふ秋の花ふ
ふて特させ多人ぶ朝夕宝殿の光を弱ふ玉かと
思ふやうて特さそふ中宮も出さとに知りてあがあさせ
捨つる大風雲の幸ふるも強く変れる変りて吹ひぐく

まことに吹まされば格子はろ〳〵と立籠ぐ紫のうち
巻載つゝろの世界の海すれすれとなれうえの嶽もとゆるまでう
吹ちらしをかし端近くて見ゆる女房の中将殿りあひて
御簾の小障子はよりよりぐ紀氣子が紫のうへ〳〵けぐやうく
あるうを白ふ立ちて春の曙の霞の目よりもおそろしさ
樺桜の乱れてうをを見ぬ立ちて居るうのくさぐひなる紀
陣のうち紅梅ぐ見るうへ唯ゆ見ふまぐ紀と雅房うて源氏の
時くて陣のまこそと殿のぐ紀入て知りすふ戸障子も吹ぬな
ちて吹〳〵ふ雨まぐ立退て宮ぐ今知りたるやうにそて
午陣へが源氏陣てはづくてよりぐとりせ紀へ〳〵陣祖母
大宮の陣のうふ〳〵ひとれど風のうく吹んと人〳〵中待り
れが知ぬりあくて殿のく乗り待るとはふ大宮すら海ぐ殿り
陣りんふいそ紀殿りうへ〳〵とて立待などして女さりをと大宮の
四方三条へ殿へ〳〵陣ふ女房の陣表あくさ風の音にも
紫のうへの面新立てうて考ふ紀ふるうる雲井の屋れてゆの
さ〳〵雲まてゆりにとれがゆる紀方付ぬるもあるまぐさ
るとこひ吹りゆ風もやこぬまぐ源の四殿へ六条院へ行うを
うへが源氏四殿へ〳〵風の袴らひふ出ふ女房出仕ふ乗り
陣へ見陣妹の姫宮の陣へ〳〵殿へ〳〵祝殿見て雲井の屋へ
女さうを中将

風さわぎ村雲まがふ夕(ゆふべ)にもわするゝまなくわすられぬ君
とよみてつかはし給へり

みゆき

源氏玉かづらをいかでよきさまにあつかはんと思ひ給ひ
給ひつゝなにくれと思ひのけふやうにもおぼさるゝに十二月帝大原
野へ行幸(みゆき)せさせ給ふに公卿殿上人世に残る人なく供奉し給ふ
源氏は御物忌にてまゐり給はず御かはらけ菓子などを大原へ
奉り給ふ蔵人の左衛門尉を御使にて帝より雉(きじ)一枝を
源氏へ下さる御製

雪ふかき小塩の山にたつ雉のふるき跡をもけふはたづねよ

御かへし

小塩山みゆきつもれる松原にけふばかりなる跡やなからん

源氏玉かづらを尚侍(かんのかみ)にまゐらし帝へ宮仕にまゐらさせんと
思ひ給ひをとげんとおぼせど宮仕にさぶらひ給ふ内侍は親の氏
をつぐならひにて源内侍藤内侍平内侍などいふ玉かづらは内大臣の
御子なれば藤氏なるに源の御子とのみ人の思へばみなそらごとなれ
ばそれにて源内侍になし給はゞ藤氏の氏神春日の御心にたがひ
給ふべし内大臣の御母大宮(おや)悩みおはしませばもしかくれ給はゞ
御孫なれば服(ぶく)あるべし急に裳着(もぎ)源の御娘との縁(ゆか)りがて

内大臣にあはさんと相談して源大家の内から朝夕に三条へ
かよひ給ふ源の内為にハ御叔母又ハむかしの御姑なる内大臣も
三条へおはしぬ源ともろとも今の内相かたらひ給ふ事ありて
玉かつらの君を親なり給へが大臣おどろき給ひしが此給へ里親を
兼ね御裳着とて女の本意添来を一式する裳の結ひ男女に
限らずめでたくおもしろき人をたのみて結はすれなるまで
此玉葛の君世へはしたかりし父大臣を親と云時親子の対面
とこしげさせ玉ひしむとしひて内大臣に結来さる事のみ
あふ大宮も御孫とおぼすにはしうあつかひて泣くなげ
なる此おかせ玉ふとて大宮

姫君かくぬいありてけるが玉かづらに事ならぬ衣どもを添けるよ
御かたよりの御贈物来とてもぞめづらしやなにやかやとくらべ来る者
なりけり末摘花よりも小袖を贈り給ふとて
衣が先を似こらせ唐衣君の袂かへしでとおもひへが
我身の早ひげ居なりでかしづかせ給ふと源の御気色いと嫌にて
見るに此末つむ花とも、いつまでかと衣とかはす身をよみ給へが
此なしのこそかかしせんとて源
から衣又から衣からころもかへすがへすもからころもなる
と書き玉ひて返しにかくよみ給へり二月
十六日よき日なりければ内大臣を呼玉かづらに御対面せさせ給ひ

浦雲ざ切目を切る和さ出物さ海〳〵ふんどうせさ多ゆ
国大臣の巻の兵部卿さ髭黒の大将を浦聟ふらるゞ国へ
尚侍ふ美の殿ふ多ふ浦姫の弘徽殿おりゝまをだよ紀ふと
行をゆゝびと和ゞせど・蔭ゞ遣ておりけゝ我ゆやゝにそを
明づをこを立ゆゝ氏ふの源の浦ふ次考みせんと思を髭黒
とゆゝびげ高さ西の殿の吳若ふ尼の源みを国大臣ふ浦ゞ
氏別の御地

早稲田大学図書館
011888008480